

平成28年度
広島市教育センター

小学校社会科において 単元を通して問題意識をもつための学習指導の工夫 —「予想カード」の活用を通して—

広島市立牛田小学校教諭 矢本 学

研究の要約

本研究は、小学校社会科の問題解決的な学習において、児童が単元を通して問題意識をもつための学習指導の工夫を探ることを目的としたものである。

文献研究から、社会科で必要とされている問題解決的な学習の工夫には課題があること、単元を通じた問題解決的な学習をするためには、単元を通して問題意識をもつことが重要であることが分かった。

そこで、シンキングツールを「予想カード」として活用し、予想する活動、毎時の見通しと振り返りの活動を行うことで、単元を通して問題意識をもつことができると考えた。

検証授業の結果を分析すると、「予想カード」を活用した予想する活動、「予想カード」を活用した毎時の見通しと振り返りの活動は、単元を通して問題意識をもつことに有効であることが分かった。

キーワード：問題意識、「予想カード」、予想、見通しと振り返り

I 問題の所在

『小学校学習指導要領解説社会編』（平成 20 年）には、児童一人一人に社会的な見方や考え方が養われるよう、社会的な事象を比較・関連付け・総合して見たり考えたりできるようにすることが大切であり、そのためには、問題解決的な学習を工夫する必要があるとしている。

北(2015)は、社会科では、単元全体を問題解決的な学習に構想することが一般化してきたとしている。しかし、学校現場では社会科の問題解決的な学習が十分に根付いていない現状が見られるとしている。「問題解決的な学習が行われていても、社会科として成立していない授業も散見される。また、問題解決的な学習に対する教師の戸惑いも聞かれる」¹⁾と述べており、問題解決的な学習の工夫には課題があることを示している。

自身の実践を振り返ると、これまで単元全体を問題解決的な学習に構想し、実践をしてきた。しかし、児童は、1時間1時間の個々の社会的な事象の理解に留まり、単元の学習問題に対して追究・解決していく学習には至らなかった。原因としては、児童が単元を通して、単元の学習問題を意識して追究・解決できるような学習指導の工夫が十分ではなかったからだと考える。

II 研究の目的

小学校社会科の問題解決的な学習において、児童が単元を通して問題意識をもつための学習指導の工夫を探る。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究仮説の設定及び検証の視点と方法

- 3 検証授業の計画と実施
- 4 検証授業の分析・考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 単元を通して問題意識をもつことについて

澤井(2013)は、問題解決的な学習の一般的な流れとして、「つかむ→調べる→まとめる」という学習過程を示している。広島市小学校教育研究会社会科部会(2015)では、「であう→ふかめる→いかす」と示している。それらを受け、図1のように単元を通した問題解決的な学習の展開過程を整理する。

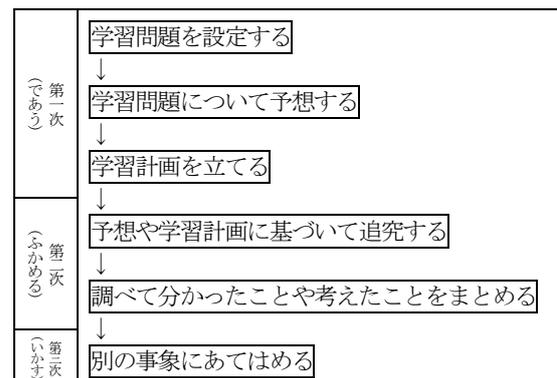


図1 単元を通した問題解決的な学習の展開過程

(澤井陽介『小学校社会 授業を変える5つのフォーカス』と広島市小学校教育研究会社会科部会『社会科研究のてびき』を基に作成)

中田(2014)は、問題解決的な単元を構想するには、子どもが「なぜなの」「どうなっているの」という問題意識をもって追究・解決していけるように構想したいと述べており、単元を通した問題解決的な学習をするためには、単元を通して問題意識をもつことの重要性を示している。

そこで、本研究における「問題意識をもつ」とは、単元を通した問題解決的な学習において、

「単元の学習問題に対して『どうなっているの』という意識をもつこと」とする。

(2) 単元を通して問題意識をもつために

ア 第一次（であう）において問題意識をもつために

(7) 予想する活動

北(2016)は、単元を通した問題解決的な学習過程の中で、予想する活動が充実することによって、子どもたちは学習問題を意識することができるようになるため、子どもたちにどのように予想させるかということは重要な課題であるとしている。そして、根拠のある予想をすること、自分の考えの立ち位置を明確にして予想の練り上げをすること、授業者は論点の違いが明確になるように整理しながら板書することを予想する活動の改善点として挙げている。

(4) シンキングツールの活用

黒上(2016)は、情報を書き出して可視化されたシンキングツールを活用することは、考察したり、説明したりすることに有効であるとしている。そこで、北が前述している予想する活動の改善点は、シンキングツールを活用することで改善できると考える。

予想する活動において、シンキングツールを使用することで、自分の予想の根拠は可視化され、自分の考えの立ち位置が明確になる。さらに、自分の予想や理由を書き出して可視化されたシンキングツールを活用して、ペアトークや全体発表の場で説明したり、もう一度予想を考え直したりすることで、自分の考えの立ち位置が更に明確になり、予想が練り上げられる。授業者は、児童が使用しているシンキングツールを基にすることで、黒板上で論点の違いが明確になるように整理することができる。

また、菅原(2013)は、シンキングツールの中でも、根拠や理由を探す場合には、クラゲチャートが有効であるとしている。

そこで、本研究では、第一次（であう）において問題意識をもつために、クラゲチャートの要素を取り入れた「予想カード」(図2)を活用する。

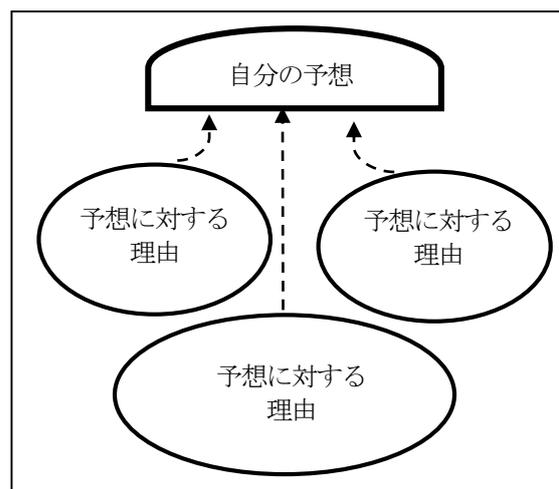


図2 「予想カード」

イ 第二次（ふかめる）において問題意識を続けてもつために

(7) 毎時の見通しの活動

北(2016)は、単元の入り口である第一次（であう）で学習問題を意識しても、それが単元の終末まで継続的に意識されていないことを問題としており、「学習問題という学習テーマを終始意識することが重要」²⁾と述べている。また、単元の学習問題に対して、今日のこの時間はどのようなことを調べるのか意識させる重要性について示している。

(4) 毎時の振り返りの活動

澤井(2015)は、毎時の学習の最後に、単元の学習問題について気付いたことを振り返ることで、単元を通した学習問題の追究を意識付ける効果があるとしている。

(7)、(4)から、毎時の見通しの活動では、授業の始まりに「予想カード」で、単元の学習問題に対する自分の予想を確認し、この時間は何を何のために学ぼうとしているのか、見通しがもてるようにする。また、毎時の振り返りの活動では、授業の終わりに「予想カード」に書かれていた自分の予想がどうだったのか、どこまで単元の学習問題が解決できたのかについて振り返ることとする。

ア、イから、第一次（であう）における「予想カード」を活用した予想する活動、第二次（ふかめる）における「予想カード」を活用した毎

時の見通しと振り返りの活動を行うことを通して、単元を通して問題意識がもてるようにする。

2 研究仮説の設定及び検証の視点と方法

(1) 研究仮説

「予想カード」を活用して、第一次(であう)で予想する活動、第二次(ふかめる)で毎時の見通しと振り返りの活動を行えば、単元を通して問題意識をもつことができるであろう。

(2) 検証の視点と方法

検証の視点と方法については、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

視点	方法
単元を通して問題意識をもつことができたか。	「予想カード」と「ふり返しシート」の分析
「予想カード」を活用して、第一次(であう)で予想する活動、第二次(ふかめる)で毎時の見通しと振り返りの活動を行ったことは、単元を通して問題意識をもつことに有効であったか。	ア 第一次(であう)における「予想カード」を活用した予想する活動の分析 イ 第二次(ふかめる)における「予想カード」を活用した毎時の見通しと振り返り活動の分析

3 検証授業の計画と実施

(1) 検証授業の計画

ア 期間

平成28年10月12日～平成28年11月2日

イ 対象

小学校第6学年 32名

ウ 単元名

「世界に歩み出した日本」

エ 単元の目標

- 日清・日露の戦争、条約改正、科学の発展やそれらに関わる人物の働きについて調べ、我が国の国力が充実し、国際的地位が向上したことや、それによって人々の生活や社会が変化したことが分かり、我が国の歴史や先人たちの働きについて関心を深める。
- 文化財、地図や年表などの資料を活用し、それぞれの歴史的事象を調べ、それらを比較・関連付け・総合して、歴史的事象の意

味をより広い視野から考えたり、考えたことを分かりやすく表現したりすることができる。

オ 単元計画

本単元で学習する単元計画について、表2に示す。単元を通して学習できるように、単元の学習問題は、「日本は、どのようにして、世界の国々から高い評価を受けるようになったのだろうか」と設定した。

表2 単元計画

週	時	ねらい	主な学習活動
第一次(であう)	1	ノルマントン号事件の風刺画から、世界の中での日本の立場に関心をもつことができる。	ノルマントン号事件について知り、不平等条約の改正について考え、学習問題をつくる。
		日本は、どのようにして、世界の国々から高い評価を受けるようになったのだろうか。	
第二次(ふかめる)	2	学習問題に対する予想、学習計画を考える。	この時代の主な出来事を基に、学習問題に対する予想を考える。
	3	日清・日露の二つの戦争について調べ、それらによって、世界の中での日本の立場が向上したことを理解することができる。	風刺画を見て、朝鮮をめぐる三国の関係を話し合い、二つの戦争は、世界の中での日本の立場を高くしたことに関係があるのかを考える。
	4	韓国併合と条約改正について調べ、それらによって、世界の中での日本の立場が向上したことを理解することができる。	日本が韓国を併合したこと、条約が改正したことを理解する。
	5	日本の産業の発展や国際的な日本人の活躍について調べ、それらにより、世界の中での日本の立場が向上したことを理解することができる。	産業や科学、文学の発展について調べる。
	6	産業が発展する一方で、さまざまな社会問題が起き、人々の民主主義への意識が高まったことを理解することができる。	産業が発展する一方で、人々の生活や社会がどのように変化したかを理解する。
	7	日清・日露戦争、条約改正や産業・科学の発展について振り返り、キーワードを使って我が国の国力が充実し、世界の中での日本の立場が向上したことを、文章で表現することができる。	今回の単元で学習したことを振り返り、学習問題について考える。
	8	学習した時代の状況を踏まえ、次の時代では、日本がどのように変わっていくのかについて、予想を考えることができる。	学習したことを基に、日本がこれからも変わっていくと思うことや、変わらないと思うことなどについて話し合う。

(2) 学習指導の工夫

ア 「予想カード」を活用した予想する活動

第一次（であう）の第2時において、自分の予想を明確にもち、学習問題を意識できるようにすることを目的として、表3に示すような予想する活動を行った。

表3 予想する活動と留意点

学習活動	留意点
① 「予想カード」に自分の予想を記入する。	① 考える際の手掛かりとなる資料を配付する。
② 「予想カード」を基に数人とペアトークを行う。	② 自分の予想や理由との違いに着目させる。
③ ペアトークや仲間の発表を参考に、再度「予想カード」に予想を書く。	③ 新たに「予想カード」に記入してもよいことを伝える。
④ 修正した「予想カード」を基に全体交流を行う。	④ 前者の発言をつなげて発言することを促すことで、自分の予想や理由の立ち位置が明確になるようにする。
⑤ 再度、「予想カード」を見直す。	⑤ 予想と理由の間に、こだわりの線を記入させる。

まず、児童は、図3に示す資料を基にして、単元の学習問題である「日本は、どのようにして、世界の国々から高い評価を受けるようになったのだろうか」について予想し、それを「予想カード」に記入した（図4は記入例）。

年	主なできごと	日本と清（中国）が戦争を始め、戦争に勝った日本は、清から賠償金をとり、さらに台湾などを日本の植民地にした。
1894	日清戦争（～95）	
1901	官営八幡製鉄所で生産が始まる	国内で初めて大規模な鉄の生産が始まった。
1904	日露戦争（～05）	日本とロシアが戦争を始め、日本が勝利し、樺太の南部と満州の鉄道などを得て、韓国を日本の勢力のもとに置くことをロシアに認めさせた。
1910	韓国併合が行われる	
1911	条約改正が達成される	
人々の抵抗を軍隊でおさえ、朝鮮（韓国）を併合した。		

図3 資料「この時代の主なできごと」

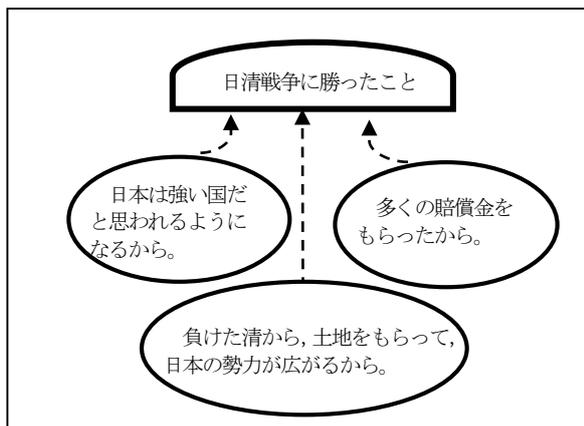


図4 「予想カード」の記入例

この「予想カード」を使用することで、自分の考えは視覚化され、自分の考えの立ち位置が明確になる。また、自分の立ち位置を明確にした上で、「予想カード」を基に説明したり、聞いたりすることで、自分の予想が練り上がっていく。授業者は、「予想カード」を黒板上に貼り、児童の考えを記入することで、論点の違いを明確にして整理することができる。

さらに、予想と理由をつなげる線が点線になっている「予想カード」には、そこにこだわりの線を入れるようにした（表3の留意点⑤）。こだわりの線とは、表3の学習活動①～④を基に、自分の理由としてこだわりのある部分を太く結ぶ線のことである。自分の予想に対する理由を意識させることで、学習問題に対する意識がもてるようにした。

イ 「予想カード」を活用した毎時の見通しと振り返りの活動

第二次（ふかめる）の第3時～第5時において、問題意識をもつことを目的として、毎時の見通しと振り返りの活動を行った。その際、第一次（いかす）の第2時で使用した「予想カード」を活用した。

(7) 毎時の見通しの活動

毎時の見通しの活動は、授業の始まりにおいて、第一次の第2時で児童が作成した「予想カード」を基に、単元の学習問題に対する自分の予想を確認した。そうすることで、「本時は何を何のために学ぼうとする時間なのか」を明確にして、問題意識をもつことができるようにした。

(1) 毎時の振り返りの活動

毎時の振り返りの活動は、授業の終わりににおいて、「予想カード」を基に、学習を終えて単元の学習問題に対する自分の予想はどうだったのかを振り返った。その際、ただ本時の振り返りをするのではなく、単元の学習問題がどれだけ解決したのかについて「ふり返しシート」（5頁図5）に記入するようにした。毎時間、単元の学習問題と本時の学習とを振り返り、単元を通して問題意識がもてるようにした。

社会科のふり回りシート () 組 名前 ()		() 組 名前 ()	
学習問題		日・日・韓国 今日の学習の振り返り ・分かったことや考えたことーそのことから自分はどう思ったか？ ・学習問題の解決に近づいた？ ・次の時間は？	
学習問題に対する自分の考え			
日・日・韓国 今日の学習の振り返り ・分かったことや考えたことーそのことから自分はどう思ったか？ ・学習問題の解決に近づいた？ ・次の時間は？		① / () <input type="checkbox"/>	
		② / () <input type="checkbox"/>	
		③ / () <input type="checkbox"/>	
		④ / () <input type="checkbox"/>	

図5 「ふり回りシート」

4 検証授業の分析・考察

(1) 単元を通して問題意識をもつことができたか。

毎時間の授業の終わりに、児童は単元の学習問題と本時の学習とを振り返り、単元の学習問題について気付いたことを「ふり回りシート」に記入した。この「ふり回りシート」の記述を基に、第2時～第5時における問題意識の有無を分析した。第2時については、「予想カード」の記述も基にして分析した。

第2時～第5時で問題意識をもっている基準を表4に示す。

表4 問題意識をもっている基準

第2時	日本の評価が高くなったことについて、理由をもって予想することができていたり、学習問題を意識した記述をしたりしている。
第3時	日本の評価が高くなったことについて、日清・日露戦争と関係付け、学習問題を意識した記述をしている。
第4時	日本の評価が高くなったことについて、韓国併合と関係付け、学習問題を意識した記述をしている。
第5時	日本の評価が高くなったことについて、産業の発達と関係付け、学習問題を意識した記述をしている。

この基準で、単元を通して問題意識をもつことができた児童ともつことができなかった児

童の人数を表5に示す。

表5 単元を通して問題意識をもつことができた児童ともつことができなかった児童の人数

単元を通して問題意識をもつことができた。	24人 (児童A)
単元を通して問題意識をもつことができなかった。	8人 (児童B)

「予想カード」を活用して、第一次(であう)で予想する活動、第二次(ふかめる)で毎時の見通しと振り返りの活動を行ったことで、24名の児童は、単元を通して問題意識をもつことができた。一方、8名の児童は、単元を通して問題意識をもつことができなかった。24名の児童にとって何が有効であったのか、8名の児童にとって何が要因であったのかの詳細については、(2)で述べる。

単元を通して問題意識をもつことができた児童(児童A)、単元を通して問題意識をもつことができなかった児童(児童B)について、「ふり回りシート」に書かれた記述から、問題意識の有無を分析する。「ふり回りシート」の記述にある波線部は、問題意識をもっていると捉えた部分である。

ア 単元を通して問題意識をもつことができた児童Aの記述(第2時～第5時)

第2時

戦争に勝ち、植民地をつくったり、鉄道の権利を得たりして、資源がよくとれたので、いろいろなことに使ったり、鉄道の利益でいろいろなものを買ったりできたと思います。戦争に勝っていた頃の日本は、とても勢いがあり、...略...

外国は、日本に勢いがあることや、技術が上がったり、力が強くなってきたと思ったから条約を改正したと思います。

第2時では、戦争に勝ったという事実だけではなく、それによっていろいろなことを関係付けて予想していた。理由をもって予想をすることができており、問題意識をもっていることが読み取れる。

第3時

弱かった日本が、日清・日露戦争で2回とも勝って、植民地を得たり、賠償金をもらって使ったりして、世界の国々から認められてきたので、このころの戦争はとても大事で重要だったのかなと思いました。世界の国々から認められるのは、日清・日露戦争で勝っただけでは無理だと思うので、次の時間、戦争で勝った後の日本の動きに注目して授業を受けたいです。…略…

第3時では、「戦争に勝っただけでは無理だと思う」と書いており、予想では戦争で勝ったことが大きいと考えていたが、日清・日露戦争の学習から、それだけではないと考えている。次の時間の学習の視点をもつことができている、問題意識をもって学習していることが記述から読み取れる。

第4時

…略…。朝鮮を日本の植民地にしたことで、欧米のように同じ立場に近づいたと思うけれど、戦をするためには武器をつくらなければいけなくて、そのためには技術が必要だと思うので、次の時間は、八幡製鉄所の技術はどのようなものだったのか注目したい。

第4時では、「欧米と同じ立場になってきた」と書いており、まだ立場が同じぐらいで、評価が高くなるには、技術が必要だということに言及している。次時で学習する産業の発達に触れており、問題意識をもって学習に取り組んでいることが記述から読み取れる。

第5時

工業の発達は、八幡製鉄所などと関係していて、八幡製鉄所は日清戦争と関係しているから、…略…。今回は、世界の国々から高い評価を受けることと今回よりつながると思うので、今回より注目して授業を受けたいです。

第5時では、前時に注目した技術について記述している。これまで学習してきた社会的事象がつながっていることに気づき、社会的事象の意味を考えることができている。今回の学習でも、学習問題の解決にどのようにつながっているかに注目して学習したいと書いており、問題意識をもっていることが

記述から読み取れる。

イ 単元を通して問題意識をもつことができなかった児童Bの記述（第2時～第5時）

第2時

今日、考えたことは、この時代に高い評価になった予想をいろいろ考えました。次の時間は、どうやって高い評価になったのかの結果が楽しみです。

第2時では、「予想カード」に理由をもって自分の予想を書くことができていた。また、「ふり返りシート」には、学習問題に対して予想したことに対して、自分の予想がどうなっているのかを楽しみにしている記述が見られ、問題意識をもっていることが読み取れる。

第3時

今日分かったことは、日清・日露戦争で、費用負担をかけて、不満が高まったということが分かりました。次の時間もがんばって勉強したいです。

第3時では、「日清と日露戦争で、費用負担をかけて、不満が高まったということが分かりました」という記述があり、「次の時間もがんばって勉強したいです。」で終わっている。学習したことへの感想に留まっており、学習問題に対する記述がなく、問題意識をもっていないことが読み取れる。

第4時

今日分かったことは、日本は、朝鮮を植民地にして、朝鮮の生活や土地などを決めたということが分かった。

第4時でも、「日本は、朝鮮を植民地にして、朝鮮の生活や土地などを決めたことが分かった」という記述に留まっており、学習問題の解決に向けた記述がないことから、問題意識をもっていないことが読み取れる。

第5時

日本は、工業を発達して、高い技術をもつようになったり、豊かになったりして、目指していた国に近づいたり、高い評価を受けるようにしたことが分かった。

第5時では、「日本は、工業を発達させて、高い技術をもつようになってきたり、豊かになってきたりして、目指していた国に近づいてきたりして、高い評価を受けるようにしたことが分かった」という記述から、学習問題を意識していることが読み取れる。

(2) 「予想カード」を活用した学習指導の工夫は、単元を通して問題意識をもつことに有効であったか。

ア 「予想カード」を活用した予想する活動は、問題意識をもつことに有効であったか。

表6 第1時と第2時における問題意識の有無

	問題意識		計
	あり	なし	
第1時	17人 A ↓ 17人	15人 B ↓ 13人 C ↓ 2人	32人
第2時	30人	2人	32人

第1時と第2時における問題意識の有無を表6に示す。第1時における問題意識の有無は、授業で単元の学習問題設定時に授業者から「もうすでに予想をしている人はいますか。」の問い掛けに挙手をしていたこと、その時間の終わりに記入した「ふり返しシート」に単元の学習問題を意識した記述や自分なりの予想の記述があったことを判断の基準とした。

第1時から問題意識をもち、第2時においても引き続き問題意識をもつことができていた児童は17名(表6のA)、第1時では問題意識をもつことができなかったが、第2時には問題意識をもつことができた児童は13名(表6のB)、第1時・第2時ともに問題意識をもつことができなかった児童は2名(表6のC)であった。

A, B, Cのそれぞれから1名ずつを取り上げ、「予想カード」や「ふり返しシート」、授業の様子から、「予想カード」を活用した予想する活動の有効性について分析する。

(7) 第1時から問題意識をもち、第2時においても引き続き問題意識をもつことができていた児童A

第2時で、「予想カード」に自分の予想を記入し、数人とのペアトークと全体発表の後、再度「予想カード」に予想を記入する時間を設けた。

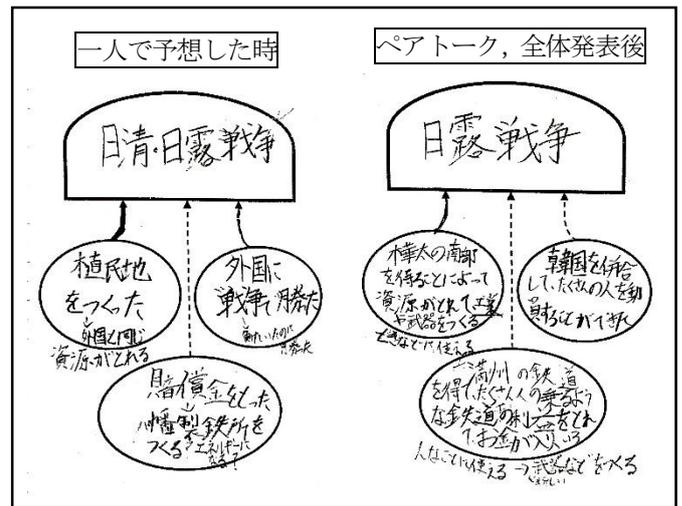


図6 児童Aの「予想カード」

図6は、児童Aの一人で予想した時と、ペアトーク、全体発表後の記述である。児童Aは、最初、日清・日露戦争という二つの戦争に勝ったことが、日本の評価を高くしたことに関係があると予想していた。しかし、理由は、日清・日露の二つの戦争を合わせて戦争と捉え、植民地や賠償金のことなど概念的なことを挙げている。一方、ペアトーク、全体発表後は、日清・日露の戦争より、日露戦争の方が影響は大きかったと捉えている。理由としては、樺太南部を得たことで、それが資源の確保につながり、武器の製造にもつながっていくこと、満州の鉄道による利益が様々な政策を行う際に使えるようになることなど、具体的な理由になっている。

その時間の「ふり返しシート」には、日本の勢いや技術の高さにも言及しており、「予想カード」には書いていない記述が見られた。それらの言葉は、仲間の発表から出た言葉なので、「予想カード」により、自分の考えの立ち位置が明確になり、仲間との理由の違いが明確にできたことで、単元の

(ア)～(カ)から、児童A、児童Bのように9割以上の児童にとって、「予想カード」を活用した予想する活動は、問題意識をもつことに有効であったと考える。「予想カード」により、理由のある予想をすることができたり、自分の考えの立ち位置を明確にした上でペアトークや全体交流ができたりしていた。そのため、仲間の意見を参考にして、自分の予想が確立されたことにつながっていた。また、授業者にとっても黒板上で「予想カード」を活用して論点を整理できるため、児童は、自分の考えの立ち位置を更に確認することができた。

一方、問題意識をもつことができなかった2名については、「予想カード」の活用した予想する活動は、有効に働いていなかった。2名の児童の手立てについては、10頁(ア) b, c で示す。

イ 「予想カード」を活用した毎時の見通しと振り返りの活動は、問題意識を続けてもつことに有効であったか。

(ア) 問題意識を続けてもつことができた児童について

第3時～第5時において問題意識を続けてもつことができた児童は、24名であった(5頁表5)。それらの児童は、授業の始まりに、第2時で自分の予想を記入した「予想カード」を見て、自分の予想の確認を行う姿が見られた。その時に、何を何のために学習をするのかという学習の目的が明確になっていたと考える。振り返りにおいては、何を何のために学習したのかという視点で振り返り、自分の予想はどうだったのか、学習問題はどれだけ解決できたのかを振り返り、単元の学習問題を意識して学習することができていた。

そのため、問題意識を続けてもつことができた24名の児童にとっては、「予想カード」を活用した毎時の見通しと振り返りの活動は、有効であったと考える。

(イ) 問題意識を続けてもつことができなかった児童について

問題意識を続けてもつことができなかった児童は、8名であった。8名の児童における第

3時～第5時の問題意識の有無を表7に示す。

表7 8名の児童の問題意識の有無

	児童B	児童C	児童D	児童E	児童F	児童G	児童H	児童I
第3時	X	X	X	X	X	X	0	X
第4時	X	X	欠	0	0	0	X	X
第5時	0	0	0	0	0	0	0	X

表7から読み取れることは、第3時において、問題意識をもつことができていなかった児童が多くいるということ、第5時において、ほとんどの児童が問題意識をもつことができていたということである。そこで、第3時と第5時の違いに着目して分析を行い、改善点を探ることとした。

(ウ) 第3時と第5時の違いについて

a 第3時の見通しと振り返り活動の様子

第3時の授業の始まりには、第2時に記入した「予想カード」を基にして、自分の予想を確かめる活動を行った。個人で「予想カード」を確認しただけで授業を進めていた。8名にとっては、何のために学習するのかという本時の学習の目的が理解できておらず、学習問題に意識が向かないまま、学習を行っていたと考えられる。

b 第5時の見通しと振り返り活動の様子

第5時の授業の始まりは、第3時と同じように「予想カード」を基にして、自分の予想を確かめる活動を個人で行った。何を学習するのかということ、学習する社会的事象に対して自分が「予想カード」にどのような予想を書いていたのかということについては、第3時と同じように確認ができていた。

さらに、全体の場で、学習問題の解決のためにこの学習をするという学習の目的の確認を全員で行っていた。その結果、表7に示してあるように、問題意識をもつことなく学習した児童は一人のみであった。

第5時においては、学習の目的が全員で共有できていたため、単元の学習問題を意識して学習が行われ、振り返り場面でも学習問題を意識することができたと考える。

Ⅱ 第3時と第5時の違いから考える改善点

a 見通し活動について

第3時と第5時では、見通しの場面において、「予想カード」を活用した見通しのもたせ方に違いが見られた。何のために学習するのか、という学習の目的を「予想カード」を活用して、どのように理解させるのかを考えておく必要がある。授業者から「今日は、こういう目的で学習しましょう。」と言うのではなく、児童から「今日は、このことについて、こういう目的で学習するんだよね。」と言えるようにしていきたい。

実際に第5時では、児童から発言を引き出しながら学習の目的を全体で共有したため、第3時で一度は途切れた問題意識を再びもつことができた児童が8人の内、7人いた。第5時においては、「予想カード」を活用した見通しと振り返り活動は、有効に働いていたと考えられる。授業者は、何のために学習するのかという学習の目的を隣の人と確認させたり、確認したことを発表させたりして、全体の中で共有しながら見通しの活動をする必要があると考える。

b 「予想カード」の活用について

児童Cのように第2時で自分の予想を確立することができなかった児童に対しては、理由を記入する部分が白紙になっている「予想カード」を第3時以降に加筆できるような活動を取り入れることは有効であると考えられる。授業の始まりに、新たに予想を書き加えたり、前時までには書けなかった理由を書き加えたりする時間を設定し、「予想カード」をより活用した活動を取り入れることで、第2時で問題意識をもつことができなかった児童も問題意識をもつことができるようになると思われる。

c どの時間も問題意識をもつことができなかった児童Iについて

児童Iは、どの時間も問題意識をもつことができていなかった。授業の様子からは、関心をもって学習に取り組んでいる姿や、自分が考えたことを全体の中で発表する場面が見られた。しかし、学習の目的が明確になっておらず、振

り返りでは、毎時の学習したことの記述のみに留まり、単元の学習問題に意識が向いていなかった。

前述したように、見通しの活動において、学習の目的を理解できるようにすることが大切である。個人で理解することの難しさがある場合は、全体共有の場面を設定し、どの児童にも学習の目的が明確になるようすることで、単元の学習問題の解決のために学習を行うという問題意識をもって学習できるようにしていきたい。

V 研究のまとめ

1 成果

「予想カード」を活用して、第一次（であう）において予想する活動、第二次（ふかめる）において毎時の見通しと振り返りの活動を行ったことは、単元を通して問題意識をもつことに有効であったと考える。

第一次（であう）では、「予想カード」の活用により、理由のある予想をしたり、自分の考えの立ち位置を明確にした上でペアトークや全体発表をしたりすることができた。それは自分の予想を確立することに有効であった。授業者は、「予想カード」を活用して黒板上で論点の整理ができ、児童にとってはそれを基に自分の考えの立ち位置が更に確認できるという良さが見られた。

第二次（ふかめる）では、「予想カード」を基に自分の予想の確認を行ったことで、学習問題に対して自分はどのように考えていたのか、この時間は何のために学習をするのかという見通しをもって学習に取り組むことができたと考える。さらに、第3時と第5時の違いの分析から、学習の目的を全体の中で共有する活動を取り入れることは、多くの児童に問題意識をもたせることに有効であることが分かった。

また、「予想カード」を活用して振り返りを

行ったことで、自分の予想はどうだったのか、単元の学習問題の解決はどれだけできたのかについて振り返ることができ、単元の学習問題を意識して学習することに有効であった。

2 課題と今後の展望

第2時の予想する活動において、自分の予想を確立することができなかった児童に対して、第3時以降に「予想カード」に加筆したり、修正したりすることを通して、学習問題に対する意識がもてるようにする必要がある。

また、第二次（ふかめる）における見通しの活動において、学習の目的を個人で理解することに難しさがある場合は、全体共有の場を設定し、どの児童にも学習の目的が明確になるようにしていくことが大切になる。そうすることで、単元の学習問題を解決するために学習を行うという目的が明確になり、問題意識をもって学習できるようになると考えられる。

これらのことに留意して活用していくことが、今後、全員にとって有効な「予想カード」になり、単元を通して問題意識をもつことにつながっていくと考える。

- ⑤ 田村学・黒上晴夫『考えるってこういうことか！「思考ツール」の授業』小学館，2013年
- ⑥ 広島市小学校教育研究会社会科部会『社会科研究のてびき』2015年
- ⑦ 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社，平成20年

引用文献

- 1) 北俊夫『“知識の構造図”を生かす問題解決的な授業づくり』明治図書，2015年，56頁
- 2) 北俊夫『だれでもできる社会科学習問題づくりのマネジメント』文溪堂，2016年，55頁

参考文献

- ① 黒上晴夫「情報を基に考察する・表現する力」『社会科教育7月号・687号』明治図書，2016年
- ② 澤井陽介『社会科授業づくりトレーニングBOOK 話し合い・討論・学習のまとめ・評価問題づくり』明治図書，2015年
- ③ 澤井陽介『小学校社会 授業を変える5つのフォーカス』図書文化，2013年
- ④ 澤井陽介・中田正弘『社会科授業のつくり方』東洋館出版社，2014年